

ディスプレイ大手が新計画・新体制

反転の機 捉える

空間づくりを手掛けるディスプレイ大手で、新中期経営計画のスタートと新社長就任が相次いでいる。リアルに苦むを相打ちに、コロナ下の3年間は厳しい状況にあったが、ようやく迎えた反転の機を捉える構えだ。主力の商業施設や専門店チェーンを基盤として重視しながら、この機に領域を広げようとしている。人への投資、原材料の高騰といった課題への対応を含め、成長性の回復を目指す。

(田村光龍)

領域拡大や人へ投資

乃村工芸社は、3月1日付で奥本清孝社長が就任した。一人ひとりの「クリエイティブ」を起点に空間のあらゆる可能性を切り拓くとする新たなビジョンを掲げ、25年度を最終とした新たな中期計画をスタートした。競争が激化するなかで、事業の高度化を進めるほか、「領域を広げる」奥本社長として、民間の資金ノウハウを活用したミュージウム開発などといった官民連携などに力を注ぐ。

3年間で70億円を投じ、業務効率化や人材育成、デジタルと同社で「ソーシャルグッド」と呼ぶ社会課題解決の分野の取り組みを進め、中期計画目標の達成とともに以降の持続的成長につなげる。

各社の連結業績と経営計画目標

(単位:百万円)

	決算期	売上高	営業利益
乃村工芸社	23/2	110,928	3,113
	26/2	1,300億円以上	78億円以上
丹青社	23/1	64,221	616
	24/1	80,000	4,400
スペース	22/12	46,707	2,096
	25/12	年率5%増	営業利益率5%

丹青社は、4月26日付で小林統社長が就任した。経営計画としては今期が最終年度となるが、次期以降もにらみながら

「まずは人的資本への投資」(小林社長)として、3Dバーンやウオークスルー動面でクライアントとのイメージ共有を進めるBIM(建築物の属性情報を併せ持つ建物情報モデル)の習熟に力を注いでいる。ここで人的資本への投資によって今後の収益確保につなげることを想定している。

さらに自ら買ったん買の取る都心部の中小築古不動産の活性化、建材・装飾材の廃番品専門OC、ブロックチェーン技術を活用した工芸作品のオンラインプラットフォームなど、基幹事業の周辺に広がる新規事業を育成している。

スペースは、25年度を最終とした中期計画をスタートした。『進化発展』をテーマに、ソフ

ト、ハード面でのプロフェッショナル強化などでの事業の発展と、働きかを高める環境整備など体力を蓄えることも含めて経営の進化を目指す。

ビスなどの分野も大きな推進力になる。(佐々木晴生社長)としており、テレワーク普及といった変化に対応したオフィスを重視している。

各社の直近の通期業績は売上げにコロナ禍からの需要回復の動きはつかえたものの、原材料の高騰や価格競争の激化によっていずれも営業減益となった。このあと入流の回復に込める商業以外を含めた需要増は想定されるが、収益性の確保が焦点になりそうだ。

地域活性化案件への参画のほか、「サー

各社の直近の通期業績は売上げにコロナ禍からの需要回復